

「仕組みられた経済 格差拡大の理由」から

ジョセフ・スティグリッツ（ノーベル経済学賞受賞）「日経サイエンス」5月号
原文はScientific Americanの昨年11月号掲載。全文がネット上に公開されている。

（ピケティの『21世紀の資本』の議論を批判した後）

ある別の理論のほうが事実はずっとよく一致する。1970年代半ば以降、経済ゲームのルールが世界レベルと国レベルの両方で書き換えられ、富裕層が有利になり、その他は不利になった。そして米国のルールはすでに労働者に冷たかったにもかかわらず、この誤った方向へルールがさらに書き換えられてきた。この見方に立つと、経済的不平等の拡大は選択の問題であり、政策と法律、規則の結果だ。

米国では他の先進国に比べてそもそも強かった大企業の市場支配力が、どこよりもさらに強まった。その一方で、他の先進国よりも弱かった労働者の市場支配力がさらに弱まった。これはサービス産業経済への移行だけが原因ではない。ゲームのルールが仕組みられていたからだ。ある政治システムによってルールが定められ、その政治システム自体もゲリマンダー（偏った選挙区割り）とボーター・サプレッション（ライバル支持者が投票に行かないように誘導する組織的な投票妨害）、金権によって仕組みられている。悪循環が生じている。経済的不平等が政治的不平等に形を変え、それが金持ちを優遇するルールにつながり、これが経済的不平等をさらに強めている。

金力と政治力のフィードバック

ある政治システムにおいておカネが政策に影響を及ぼし、経済的不平等を政治的不平等に転換する道筋が、政治学者によって詳しく記録されてきた。富裕層がその政治力を用いてゲームのルールを自分たちに有利なように変えるにつれ（例えば独占禁止法を緩める、労働組合を弱くするなど）、この政治的不平等は経済的不平等をさらに大きくする。私を含め経済学者は数理モデルを用いて、おカネと規則の間のこの双方向フィードバックが働く結果として、少なくとも2つの安定状態が生じることを示した。経済的不平等が小さな状態からスタートした場合、政治システムはその状態を維持するようなルールを生み出し、不平等の小さな平衡状態に至る。これに対し、米国のシステムは不平等が拡大するもう1つの安定状態にあり、その状態は民主的な政治が目覚めない限り今後も続くだろう。

ルールがどのように形成されてきたかを説明するには、独占禁止法から話を始める必要がある。米国で独占禁止法が立法化されたのは128年前で、市場支配力の集中を防ぐのが目的だった。しかし、その執行は弱められてきた。技術の変化によって少数のグローバル企業が市場支配力を握るようになり、実際にはむしろ執行を強化すべき時代なのに。